

## 論文の内容の要旨

論文題目 ペルー、カハマルカ県山村における社会的振る舞いと利益追求  
ー都市向けチーズを生産販売する農民の計算と配慮からー

氏名 古川 勇気

本論文は、南米ペルー共和国（以下、ペルー）北部山地のカハマルカ県山村において都市向けチーズを生産販売する農民の経済実践を、計算と配慮の視点から民族誌的に論じたものである。同県は国内有数の酪農地帯で、各山村の大半の農民世帯では、主に自給自足のための耕作と平行して、乳牛を中心とする家畜飼育をおこなっている。週末にチーズの定期市が立つような山村では、多くの農民が自前の生乳を簡易な生産方法で生チーズに加工して売っている。また多くの山村では、大半の農民が毎朝生乳を地域のチーズ生産者に渡している。チーズ生産者は専門の生産者ではなく畑作業をおこなう農民でもあり、彼らは近隣から牛乳を買い取って自宅の製造所でチーズを生産し、都市に向けて売っている。こうした状況において、市場経済の領域は、日常生活に不可欠な地域マーケットのみならず、金銭を媒介とした生乳等の買取を通じて、日々の農村生活の一部となっている。他方、チーズ生産者は農村に住む農民でもあり、村内での社会的な振る舞いをもおこなわなくてはならない。本論文の目的は、農民たちが、村内の社会関係への配慮と金銭的な損得計算、或いは社会的に振る舞う領域と市場経済での利益追求を目指す領域の間をいかに行き来し、一見相反する双方の領域が重なる状況にいかに対応しているかを、民族誌的な記述分析を通じて明らかにすることである。市場経済の影響が恒常的に村内に入り込み、貨幣経済が所与のものになった今日の状況において、チーズ生産の維持のため不可欠な、村内の社会関係への配慮と金銭的な利益を追求する損得計算の両立が主要な焦点である。

本論文は序章と終章を含めて 8 章構成である。

序章では、冒頭で上記の問題設定を示したうえで、先行研究の批判的な検討をおこなった。まず、ラテンアメリカ農民研究において、古典的な研究にはみられたが、1980 年代までのアンデ

ス人類学では失われた、市場経済や都市部の影響を含めて農民の経済実践を議論する視点の必要性を指摘した。次に、経済人類学における、実体主義・形式主義、モラルエコノミー・ポリティカルエコノミー論争を整理し、農民の実践を一つの目的、一つの枠組みで論じるのでは現実を的確に捉えきれないと指摘した。さらに、こうした問題を乗り越えるために、近年のアンデス人類学で提唱されている「世帯（家）モデル」を検討した。スティーヴン・グードマンらは、農民の節約を前提とする世帯経済の領域とその外側の市場経済とを独立的に論じ、エンリケ・メイヤーらは、農民の商品作物と自給自足作物への対処の違いから彼らの「計算」を議論した。以上の検討を踏まえ、最後に、農村をマーケットの周辺とみるこれらの先行研究と本論文は、次の3点において扱う状況が異なっていることを指摘した。第一に、本論文のチーズを生産する農民の実践には、社会的な関係と市場的な貨幣関係とが同一領域において重なる状況がみられる。第二に、そうした状況において、彼らは社会文化的な配慮を含めた広義の計算または配慮と、市場に対する数字による収支計算の双方をおこなわなくてはその生計が維持できない。第三に、先行研究では、農民と市場経済とを結び付ける外部アクター（仲買人や開発支援者）の存在や、彼らと農民との関係性が看過されている。

第2章では、第一にペルー山村における酪農業を概観し、それがコンスタントな市場経済への参入を促し、金銭的利益をもたらすものであることを指摘した。次にカハマルカ県の都市向けチーズを生産販売する農民が主に利用するフレッシュチーズ流通網と、県特有の商品であるマンテコッソチーズ流通網の概要を示した。最後に、両流通網は殺菌処理による均一な商品を扱う大会社の販路とは異なり、いわば多様な市場へとつながるものであることを指摘した。

第3章では、フレッシュチーズ流通網の一端をなすワルガヨック郡山村のチーズ生産者の食生活や交換活動の事例を分析した。彼らは消費において市場に大きく頼っているため、数字による収支計算をおこなわないと生活や生産が維持できない状況にある一方で、近隣農民との関係には、生乳の買い取りに加え、農業の労働交換やバターやホエーの提供、前貸しやツケのように、恒常的な社会関係の（再）確認・強化がみられることを指摘した。

第4章では、舞台をマンテコッソチーズ流通網の主要生産地であるチャンタ・アルタ村に移し、農民の生乳及び乳製品に関する販売形態の違いを分析することで、彼らが都市の影響をどのように捉えているのかを考察した。同山村の農民の中には、グードマンのいう世帯経済の領域で資本を維持・拡大し、市場経済の領域に消極的にしか関わらない者のみならず、市場経済の浸透や農村開発の影響によって、簡単な収支計算や台帳への記録という処理能力、さらに専門的な生産技術などを持ち合わせ、市場経済に積極的に参入する者がいる。この点を踏まえ、本章後半では、今日的状況において農民はどのような要因によって積極的に市場経済に参入するようになるのかを論じた。

第5章では、第3章で扱ったワルガヨック郡山村のチーズ生産者による近隣農民への配慮が、山村における気前の良さを示す文化的慣習に基づくものであり、彼らは良き村人として振る舞うことで、受け手からのより安定した生乳提供を期待していることを明らかにした。そのうえで、チーズ生産者と近隣農民との関係に軋轢が生じた事例を詳細に分析した。例えば、農民から多く

の要求を受ける事例では、チーズ生産者は短期的な損失を被るものの気前の良いイメージを示すことで長期的な生乳提供を確保している。他方山村での祭りの事例では、彼らは祭りの開催に関わる労働を惜しみなく提供することで気前のよいイメージを与えつつ、その裏で利益追求のための収支計算をおこなうことで、より多くの利益を得ている。以上から、彼らは数字による収支計算をおこなうが、表で気前の良い村人として振る舞っているため、社会的な軋轢を回避できる場合もあると主張した。

第6章では、マンテコッソチーズ流通網において、マンテコッソチーズの原料であるケシーリョという生チーズを売買する、チャンタ・アルタ村の市場における取引について民族誌的に詳述した。同市場の取引においては、ケシーリョを売る農民が一時的に取引相手を変更することがあるため、従来のバザール経済の議論ではあまり想定されていなかった、固定的な関係から一回的な関係へ、さらにまたもとの固定的な関係へ、といった通時的な可変性がみられる。こうした事例では、農民は世帯消費を満たすための数字による収支計算を優先するが、仲買人との顔つなぎをおこなっているため、長期的な信頼関係に対する配慮も欠いていない。このことから、農民は仲買人との信頼関係に配慮を示したうえで、世帯消費の多寡に応じて取引を主体的に選び取っていると指摘した。

第7章では、ワルガヨック山村において実施されているチーズ技術供与の開発を事例として、支援者が都市部でより高値で売れるという価格計算から殺菌チーズの生産を指導するのに対し、参加者である農民は、そうした計算から取りこぼされる要因まで考慮して、実施過程において適宜開発内容を取捨選択していることを明らかにした。メイヤーらは農民の計算に関して、貨幣による収支計算のみならず労働コストまで考慮するのが会計監査による計算であるのに対して、農民は労働コストを考慮せずに、現金の流れのみの収支計算をおこなっていると論じた。この指摘との対比で事例をまとめると、当該開発の支援者は、より高価格で売れる殺菌チーズを生産するために必要な低温殺菌処理の技術を指導するが、それに伴う労働コストは考慮していないため、彼らの計算は厳密な意味で会計監査の計算とは異なっていた。対して、農民は殺菌処理を実践してみた結果、以前よりも多くの作業時間と労働力が必要なことに気づき殺菌処理を継続しなかったため、彼らの計算は会計監査の処理に近いものになっている。最後に、こうした「彼らなりの」合理的な判断は、参加者の取捨選択を可能にする開発の「余白」によるものであることを主張した。

終章では、カハマルカ県でチーズを生産する農民の計算実践を改めてまとめ、近年のアンデス人類学の先行研究と対比する形で議論をおこない、本論文の意義を示した。彼らの計算実践をまとめると次のようになる。彼らは、近隣農民に対して社会的な気前の良さを示したうえで、生産による利益を得るための収支計算をおこなう。仲買人との関係では、仲買人への配慮を示しつつも変化する世帯消費を満たすことを優先する。支援者との関係では、収入拡大を望むが既存の生活リズムへの配慮が顕在化するとそれ以上の利益を求めようとはしない。こうした計算実践の枠組みがあるために、彼らは社会的な領域と市場経済の領域とが重なる場合にも柔軟に対応できるのである。以上から、グードマンらの主張とは異なり、世帯経済と市場経済の領域は「連続

するもの」であることを主張した。また本論文が扱った今日的状況では、市場の多様化によって農民の選択肢が増加していることを指摘した。最後に、本論文で分析した農民の経済実践では、社会的に振る舞うことと市場経済で利益追求をすることは、ときに軋轢を生み、それを回避するために計算と配慮が日々試行錯誤されていることを、再度確認した。本論文は、市場と社会の双方が日常の一部となった状況における、そうした農民たちの試行錯誤の実践を記述分析し、それによって経済人類学及びラテンアメリカ農民研究の展開の方向性を民族誌的に示唆するものであった。